

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	伊藤 一真
論文担当者	主査 廣瀬 宗孝
	副査 齊藤 寿郎
	副査 馬淵 誠士
学位論文名	Subcutaneous emphysema associated with laparoscopic or robotic abdominal surgery: a retrospective single center study (腹部鏡視下手術における皮下気腫に関する後方視研究)
論文審査の結果の要旨	
<p>皮下気腫は腹腔鏡・ロボット支援下手術における合併症であるが、その正確な発症率と臨床に与える影響は不明である。本研究の目的は、皮下気腫発症率、危険因子、および重篤な合併症である術後抜管困難への影響を評価することである。</p> <p>対象は2019年10月から2022年9月に兵庫医科大学病院で腹腔鏡またはロボット支援下腹部手術を受け、皮下気腫を術直後の胸部/腹部レントゲン検査、あるいは看護師による術中触診による所見によって確認した患者である。後向きに収集したデータを用いて危険因子を多変量解析で明らかにした。</p> <p>結果は2503名の患者で皮下気腫は577例(23.1%)に確認された。皮下気腫発症の危険因子は、女性、80歳以上の高齢、BMI20以下、360分以上の長時間手術、ロボット支援下手術、最大腹腔内圧15mmHg以上、および呼気終末二酸化炭素濃度が50mmHg以上の7因子であった。皮下気腫に起因する抜管困難例は10例(SCE全体の1.7%)で、その危険因子は80歳以上の高齢、最大腹腔内圧15mmHg以上の2因子であった。</p> <p>以上より皮下気腫発生率は23.1%で、高齢、低BMI、長時間手術、ロボット支援下手術、高い腹腔内圧が皮下気腫発症と関係することが明らかになった。</p> <p>本研究は、近年の腹部鏡視下手術における合併症の皮下気腫発症の危険因子および皮下気腫に起因する術後抜管困難の危険因子を明らかにしたものであり、今後の安全な周術期管理に役立つ重要な知見を提供することから、学位授与に値すると判断した。</p>	